

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370875

研究課題名(和文) 西方地中海におけるフェニキアとカルタゴ-宗教的側面からの分析を中心に

研究課題名(英文) Phoenicia and Carthage in the Western Mediterranean - on the Analysis from the Religious Aspect

研究代表者

佐藤 育子 (SATO, Ikuko)

日本女子大学・文学部・研究員

研究者番号：80459940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：西方地中海におけるフェニキアの海外発展の諸段階を、特に宗教的側面から検証し明らかにした。これにより、当該地域においては、墓制や葬送儀礼の側面から「フェニキア的段階」と「カルタゴ的段階」に明確な区分があることがわかった。一方で、在地の文化とフェニキア人がもたらした文化の間には一定の連続性が存在することも示唆できた。日本では初めてとなるフェニキア・カルタゴ研究会を設立し、現地調査による新しい知見等の成果は、毎年公開報告会を通じて社会に還元・発信している。

研究成果の概要(英文)：I clarified the various stages of the Phoenician overseas expansion in the western Mediterranean, especially verifying from the religious aspect. As a result, it was found that in the areas concerned, there was a clear division between Phoenician Stage and Punic Stage from the viewpoint of burial systems and funeral rites. On the other hand, it was also suggested that there was a certain continuity between the indigenous culture and the new culture Phoenicians brought. With other researchers, I established The Society for Phoenician and Punic Studies in Japan for the first time and we promote the new knowledge gained by field survey, through annual public meeting for a broad community.

研究分野：人文学

キーワード：フェニキア カルタゴ 地中海 文化的相違 文化的連続 女神崇拜 聖域 幼児犠牲

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本におけるフェニキア史およびカルタゴ史に関する研究は、研究領域が古代オリエント史と西洋古代史の両方にまたがり、これまで専門的な研究がなされてこなかった分野である。さらに、フェニキア人およびカルタゴ人について記された文献史料の多くがギリシア語やラテン語による記述ということもあり、彼らの歴史はギリシア史やローマ史の周辺領域として扱われることが一般的であった。だが、フェニキア・カルタゴ史は広く見れば、ギリシア史やローマ史の範疇では構築できない、いわば「失われた古代地中海史」を補完する上で欠くことのできない研究分野であると考えられる。

(2) 研究代表者はこれまで、主にカルタゴ出土の奉納碑文の分析をもとに研究を進めてきた。初期の関心事は、碑文奉納者の出自を丹念に分析することにより、彼らの帯びていた職務や政治的状況を、外側からの史料であるギリシア・ラテン語文献史料と対照させながら明らかにすることにあつた。しかし近年では、碑文中に見られる神々の属性を特定することにより、その背景に存在すると考えられる母市であるフェニキアとその植民市であるカルタゴを巡る様々な状況、より具体的に言えば、地中海における両者の発展段階を巡る問題との関連性に関心を抱くに至つた。

(3) 平成 20 年度から 4 年間に亘り、基盤研究 (B) 課題番号 20401033 「古代イスラエルにおける一神教の成立過程に関する考古学的研究」(研究代表者: 慶応義塾大学教授 杉本智俊) に研究分担者として、基盤研究 (A) 課題番号 20251007 「フェニキア・カルタゴ考古学から見た古代の東地中海」(研究代表者: 京都大学大学院教授 泉拓良) に連携研究者として関わることにより、目指すべき研究課題がより具体化して来た。

### 2. 研究の目的

フェニキア人の西方への海外発展の諸段階を宗教的側面から検証することにより、のちに西地中海世界の覇者となったカルタゴおよびカルタゴの影響下に置かれた諸都市と母市であるフェニキアとの関係を考察する。特に以下の点に着目して、研究を行うこととする。

(1) フェニキア本土で崇拝された神々とカルタゴを中心としたポエニ世界で崇拝された神々の地域差・時代差はあるのか。

(2) 西地中海域における「フェニキア的段階」と「カルタゴ的段階」に類似点あるいは相違点はあるのか。

### 3. 研究の方法

(1) まずは、一般に曖昧に使用されている「フェニキア人」という概念を、時代および地域に分けて検討することから始める。

(2) 文献史料だけではカバーできない点を、地中海のフェニキア人の入植地について積極的な現地調査を行うことにより、各地の遺跡の共通点や宗教に関する遺構プラン(聖域・墓域)の類似点・相違点および地域差・時代差についても明らかにする。

(3) 海外で開催される国際学会に可能な限り参加して発表をし、最新の研究成果に触れるとともに、実際に発掘作業に携わる現地の研究者とのコンタクトを継続して行う。

(4) 各年度に行った調査や参加した国際学会の概要を、毎年国内の学会や研究会で発表するとともに、フェニキア・カルタゴ史に関する独自の研究会を設立し、その活動を社会に向けて広く発信していく。

### 4. 研究成果

(1) 平成 25 年度は、一件の学会発表と二件の国際学会での発表および二件の海外調査を行った。

第 20 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会で、「フェニキア人」および「カルタゴ(ポエニ)人」の概念を、M.E.オーベの所論を応用し、4 つに区分して改めて検討した。これにより、前 8 世紀以降、西方の植民都市におけるフェニキアの宗教の浸透度は、母市との関係によって、あるいは植民都市同士の関係によって一様ではないことを明確にした。さらに、前 6 世紀半ばの西地中海におけるフェニキアからカルタゴへの海上覇権の転換は、宗教的観点から見れば、カルタゴによる母市からの宗教的自立を伴うものであったことを結論づけた(発表、論文)。

以上をもとにして、中国での第 10 回日・韓・中西洋古代史シンポジウムおよびサルディニアでの第 8 回フェニキア・カルタゴ国際学会で、英文による学会発表を行った(発表、論文)。

平成 25 年度には 10 月にサルディニアでの現地調査、翌年 3 月にはスペインでの現地調査をそれぞれ行った。両調査には、研究協力者として、カルタゴ滅亡後の地中海のローマ化の過程を専門に研究する青木真兵氏(関西大学)の参加を得た。これに関する青木氏の成果は発表、論文にまとめられている。

サルディニアでの調査は、主にフェニキア人の入植拠点となった島南西部の沿岸部を中心に北東沿岸部や一部内陸部にまでおよび、入植に関わる具体的状況について実際に遺跡を回り確認することで大きな成果が

得られた。

特に、先住民の文化であるヌラーゲ文化と後から入植したフェニキア人との間には、近年、相克よりもむしろ平和な一定の共存関係を想定する研究が目立つが、モンテ・シライのアシュタルテ神殿（前8世紀）やタッロスのトフェト（前7世紀）は、フェニキア人がヌラーゲ時代の建造物を一部改変し、その後再利用した事例として確認できる。両者の関係を精査するには、各遺跡から出土する陶器の類型や編年など、より一層物質文化の観点からのアプローチが必要であることも今後の課題として残った。

ギリシア・ラテン語の文献史料からは、前6世紀半ば以降、カルタゴがサルディニアに度々軍事遠征を行い、遅くとも前6世紀末までにはサルディニアはカルタゴの勢力圏に組み込まれていることが理解できる。今回、内陸のバルミニに行く途中で偶然に発見したヴィッラマールのカルタゴ時代のネクロポリスは、フェニキア時代は海岸部に留まったフェニキア人の拠点で、次第に内陸部へ浸透していく過程を物語っている。つまり、これまでの沿岸部を拠点とした交易ネットワークから、内陸の先住民社会への文化的浸透を伴う政治的なシフトの転換を遺跡からも確認することができた。

モンテ・シライの遺構において顕著であるように、火葬を中心としたフェニキア時代のネクロポリス（前7世紀～前6世紀）と地下墓を中心とするカルタゴ時代のそれ（前5世紀～前3世紀）との墓制には明らかな相違が見られた。

以上のことに加えて、現地の研究者との意見交換により、サルディニアの編年においては、「フェニキア的段階」と「カルタゴ的段階」を明確に区分して考える必要性を強く感じた。換言すれば、民族の違う在地の文化とフェニキア人のもたらした文化に連続性が考えられる一方で、同族とみなされるフェニキア文化とカルタゴ文化の間に相違性を認めることが確認できた。

スペインでの調査は、アンダルシア地方とイビサ島の二つに拠点を置いて行った。特にアンダルシア地方の現在のカディス周辺はフェニキア人が最も早くに入植した大西洋に面する極西の拠点でありながら、現在の地形は古代のそれとは全く様相を異にしている。古代の地図をもとに今は消えてしまった海岸線の痕跡をたどると、女神アシュタルテを祀った神域の場所は特定できなかったものの、文献史料が示すように、かつては存在したコティヌッサ島の両端に向かい合うように、テュロスの主神メルカルトを祀った神域とカルタゴの主神バアル・ハモンを祀っ

た神域があったことを確認できた。

上記のカディス（現カディス）周辺へのフェニキア人の入植の目的は、タルテッソスの先住民社会との銀に代表される鉱物資源の取引である。リオ・ティントの銀の採鉱場跡を实地検分することにより、周囲の地形等についての状況が把握できた。また、在地の富裕層にとって、フェニキア人によってもたらされた東方文化との出会いは、エル・カランポロでは女神アシュタルテの崇拜という宗教的融合をもたらしたが、現在、セヴィーリヤ考古学博物館で所蔵するアシュタルテの小座像と台座に刻印された銘文を実際に見ることで、より理解が深まった。

イビサ島の調査では、現地の考古学者J・ラモン氏とB・コスタ氏の案内と説明を受けた。島南部のサ・カレタ遺跡では、奥まった入り江の小さな岬の突端に前7世紀の居住部分の一部が発掘保存されており、シチリア島のソルス（ソルント）同様フェニキア人の入植地に共通して見られる地形的条件を確認することができた。

ネクロポリスそのものを博物館として保存・展示しているプッチ・デス・モリンスでは、モンテ・シライのそれに共通してみられるフェニキア時代とカルタゴ時代の墓制の違いを改めて認識でき、概して、西方地中海においては、特に宗教面で「フェニキア的段階」と「カルタゴ的段階」の間に明確な区分をあることを再確認できた。

平成25年9月1日付けで、任意団体としてのフェニキア・カルタゴ研究会を設立した。事業内容として、以下の項目を掲げる。

1. フェニキア・カルタゴに関する研究会講演会の開催
2. 国内外の各種学会への参加、情報収集、情報提供
3. 会員の研究テーマに対する相互援助
4. 会報（ニュースレター）の発信
5. 前各号に掲げる事業に附帯または関連する事業

（2）平成26年度は、二件の学会発表と一件の公開報告会および一件の海外調査を行った。

第21回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会において、平成25年度に実施したサルディニアにおける調査の内容を口頭発表し、論文にまとめた（発表、論文）。

日本オリエント学会第56回大会において、平成25年度に実施したサルディニア、スペインにおける調査の内容を口頭発表した（発表）。

フェニキア・カルタゴ研究会の第1回目の公開報告会を開催し、社会に向けてこれまでの研究成果を発表した。発表内容は以下の通りである。

報告1：青木真兵「サルデーニャ島におけるフェニキア・カルタゴ遺跡 - 最新の発掘状況と共に」(これは、平成26年7月に青木氏自身が参加した、サルディニア島モンテ・シライでの発掘報告も含むものである。発表)

報告2：佐藤育子「スペインにおけるフェニキア・カルタゴ遺跡」(平成26年3月に行った現地調査の成果をまとめたものである。発表)

平成27年3月にマルタ・ゴゾ島およびキプロス島での現地調査を行った。マルタ・ゴゾ島での調査には、研究会のメンバーである後藤麻希子氏が研究協力者として参加した。キプロス島では、一部行程で環境地理学を専門とする小方登氏(京都大学教授)と同行し、調査を行った。調査の目的は、フェニキア・カルタゴ系遺跡の現地状況の確認と博物館資料の調査および関連資料の収集である。

マルタ島やゴゾ島に見られる入り組んだ海岸線は奥深い入り江を形成し、船の停泊あるいは避難所としての天然の港の役割を果たしたと考えられる。特にゴゾ島のイムジャーラ・イッシーニ湾およびシュレンディ湾はその典型であり、すでに調査したイビサ島のサ・カレタ同様フェニキア人が好んだ入植地形を示していることが確認できた。

ゴゾ島西部のラス・イル・ワッディーヤの神殿遺構は、壁龕に掘り込まれた文様から通称「タニトの神殿」として知られる。その詳細は定かでないものの、付近の水利施設との関係は、フェニキア本土のアムリット(シリア)やモティア(シチリア)の水神殿との関連性を想起させ、非常に興味深い遺構である。

今回の調査では事前の申請により、普段は閉鎖している遺跡についても実地検分ができた。そのうちの一つが、マルタ島南部のマルサシュロック湾に近いタス・シルジの聖域である。マルタでは非常に良質の石灰岩が採掘され、新石器時代にはそれらを用いた巨石神殿が数多く建造されている。タス・シルジのそれも、元来は地母神を祀るそのような巨石神殿の一つであったが、後に入植したフェニキア人が自らの女神アシュタルテを祀る神殿へと改変し、その信仰はローマ時代まで続いていく。現地ですべて確認することができ、さらに現在も継続して行われている発掘の状況を知ることができた。

前一千年紀のキプロス島には原キプロス

系都市、フェニキア系都市、ギリシア系都市が並立して存在していたが、今回の調査でこのこれらの都市遺跡(アマトゥス、イダリオン、クーリオン、パフォス、キティオン)を回ることができ、各都市の立地条件、特色をそれぞれ把握することができた。

なお、キプロス島では青銅器時代から在地の地母神信仰が存在し、特にキティオンのカタリ地区では、銅の精錬施設と関連づけられた女神崇拜の痕跡が認められる。フェニキア人の入植とともに、青銅器時代の神殿の基礎部分を利用して建造されたアシュタルテ神殿のプランを確認するとともに、別のバンブーラ地区の聖域と比較して検討した。

さらに特別に許可をもらい、現在、キプロス島で唯一稼働している銅山会社Hellenic Copper Mineが所有するトロードス地方の古代の銅山跡を見学、調査した。平成26年3月に訪れたスペインのリオ・ティントの銀山跡と重ね合わせて、古代の冶金業についてのイメージが喚起された。

内陸のイダリオンは、前5世紀、キティオンの拡大によりその支配下に入るが、近年の発掘で、そこにはフェニキア支配時代の行政機関が置かれていたことが判明している。最近建てられた遺跡付属の小さな博物館には、フェニキア語で記された行政文書が展示されており、現在の状況とこれまでの発掘成果を確認することができた。

以上に加え、ニコシアの在キプロス・アメリカ考古学研究所(CAARI)で研究に関する資料および情報収集ができ、有益であった。

(3)平成27年度は海外調査は行わず、三件の学会発表と一件の公開報告会を行った。

第22回ヘレニズム～イスラーム研究会において、平成26年度に実施したマルタ、キプロスにおける調査の内容を口頭発表し、論文にまとめた(発表、論文)

日本オリエント学会第57回大会において、マルタ、キプロスの調査をもとにアシュタルテ崇拜に関する口頭発表を行い(発表)在地の地母神信仰が、フェニキアの女神アシュタルテ崇拜に同化・吸収されていく過程について、両者を比較し検討した。カルタゴに最も近くその勢力範囲に入っていたマルタで、後代においてもなおアシュタルテ崇拜が根強く残った事実は、カルタゴを中心とするポエニ世界で崇拜された女神タニトとの相違点を改めて考えさせられる契機となり、これについては、今後のさらなる課題として行きたい。

アコリス考古学プロジェクト2016におい

て、ごく近年、学会で再検討が求められている「カルタゴの幼児犠牲性」についての最新の情報と学会動向を紹介した(発表)。これは、2014年にアメリカで開催されたアメリカオリエント学会(American Schools of Oriental Research)の年次大会でのワークショップ Infants as Votive Offerings in Phoenician Carthage および 2015年の年次大会でのセッション Infants as Votive Offerings in Ancient Carthage に参加し、国際レベルでの最先端の研究動向に触れ、海外の研究者と意見交換をした成果である。

平成 26 年度に引き続き、フェニキア・カルタゴ研究会の第 2 回目の公開報告会を開催した。今回は 2 名のゲストスピーカーを迎え、より多角的に地中海におけるフェニキア・カルタゴ像について検討し、フロアも交えてのトークセッションも企画した。発表内容は以下の通りである。

報告 1：佐藤育子「マルタ、キプロスにおけるフェニキア・カルタゴ遺跡」(平成 27 年 3 月に行った現地調査の成果をまとめたものである。発表)

報告 2：小方登「衛星画像と地形データで見るフェニキア・カルタゴの都市の立地」

報告 3：青木真兵「カルタゴ衰退・滅亡後における西方フェニキア都市の動向」

報告 4：長谷川岳男(鎌倉女子大学教授)「古代ギリシア人の「植民」研究の新動向 - 西地中海域を中心に - 」

トークセッション

平成 25 年度～平成 27 年度にかけての 3 年間の海外調査を含む研究の成果を、視覚的効果も考慮し、ポスター発表という形で行った(発表)。

平成 28 年 3 月 8 日にフェニキア・カルタゴ研究会のホームページを公開した。今後、毎年行う報告会の内容をニュースレターという形で、Web を通して社会に向けて発信していくことを検討している。

#### (4) 総括

以前の科研費助成事業におけるチュニジア、レバノン、リビア、シチリアに加え、本科研費助成事業で新たにサルディニア、スペイン、マルタ、キプロスの各地域について調査することができた。個々の事例の成果についてはすでに述べた通りだが、フェニキア人およびカルタゴ人が実際に入植した場所を現地調査することにより、出土した遺構や遺物などモノを実際に見ることから得られた知見は非常に大きい。

特に西方地中海においては、墓制や葬送儀礼の側面から「フェニキア的段階」と「カルタゴ的段階」に一定の区分を設けることが

明らかに確認できたが、同時に、先住の在地の文化とのちにフェニキア人がもたらした文化の連続性およびフェニキア衰退・カルタゴ滅亡後のポエニ文化の存続性についてもさらに考察していく必要性を感じた。これまでの成果を踏まえつつ、今後は西地中海のみならず東地中海をも含む地中海全域にわたって、より長期的波動の中でフェニキア・カルタゴ文化の発展と変容を考察して行きたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計 5 件)

佐藤育子 「地中海におけるフェニキア人の活動 - マルタ・キプロスの事例を中心に - 」『第 22 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』Vol.22 査読無 2015 年 144 - 153 頁

青木真兵 「サルデーニャ島のフェニキア人と『ローマ化』-都市スルキスの二言語併用碑文から-」『駒澤史学』第 84 号 査読無 2015 年 133 - 145 頁

佐藤育子 「地中海におけるフェニキア人の活動 - サルディニアの事例を中心に - 」『第 21 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』Vol.21 査読無 2014 年 113 - 119 頁

Ikuko Sato "Phoenicians in the East and Punics in the West", *The Tenth Japan-Korea-China Symposium on Ancient European History*, 査読無 2013 年 118 - 129 頁

佐藤育子 「東方のフェニキア人と西方のフェニキア人」『第 20 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』Vol.20 査読無 2013 年 48 - 54 頁

##### [学会発表](計 14 件)

佐藤育子 「フェニキア人の海外発展 - 地中海の事例を中心に - 」(ポスター発表) 第 66 回日本西洋学会大会 2016 年 5 月 21 日～22 日 慶應大学

佐藤育子 「マルタ、キプロスにおけるフェニキア・カルタゴ遺跡」フェニキア・カルタゴ研究会第 2 回公開報告会 2016 年 3 月 13 日 放送大学東京文京学習センター

佐藤育子 「カルタゴにおける幼児犠牲：最近の学会動向から」アコリス考古学プロジェクト 2016 年 3 月 12 日 国土館大学

佐藤育子 「地中海におけるフェニキア人の活動 - アシュタルテ崇拜を中心に」日本オリエント学会大会第 57 回大会 2015 年 10 月 17 日～18 日 北海道大学

佐藤育子 「地中海におけるフェニキア人の活動 - マルタ・キプロスの事例を中心に - 」第 22 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 2015 年 7 月 4 日～5 日 金沢大学

佐藤育子 「スペインにおけるフェニキア・カルタゴ遺跡」フェニキア・カルタゴ研究会第 1 回公開報告会 2015 年 1 月 25 日 世界史研究所（東京都渋谷区）  
青木真兵「サルデーニャ島におけるフェニキア・カルタゴ遺跡 - 最新の発掘状況と共に」フェニキア・カルタゴ研究会第 1 回公開報告会 2015 年 1 月 25 日 世界史研究所（東京都渋谷区）

佐藤育子 「西地中海におけるフェニキア人の活動 - サルディニア・スペインの事例を中心に - 」日本オリエント学会第 56 回大会 2014 年 10 月 25 日～26 日 上智大学

佐藤育子 「地中海におけるフェニキア人の活動 - サルディニアの事例を中心に - 」第 21 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 2014 年 7 月 5 日～6 日 金沢大学

青木真兵 「属州サルディニアにおけるフェニキア・カルタゴ文化について - 都市スルクスの二言語併用碑文を中心に - 」(ポスター発表)第 64 回日本西洋史学会大会 2014 年 5 月 31 日～6 月 1 日 立教大学

佐藤育子 「第 8 回フェニキア・カルタゴ国際学会とサルディニアのフェニキア関連遺跡の踏査について」第 20 回イスラエル考古学研究会 2013 年 12 月 21 日 北野南部会館（東京都八王子市）

Ikuko Sato, "The Phoenicians in the East and the Punic in the West" The 8<sup>th</sup> International Congress of Phoenician and Punic Studies, 21-26 October 2013, Carbonia/Sant'Antioco, Sardinia, Italy.

Ikuko Sato "Phoenicians in the East and Punics in the West", The Tenth Japan-Korea-China Symposium on Ancient European History. 18-21 October, Beijing, China.

佐藤育子 「東方のフェニキア人と西方のフェニキア人」第 20 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 2013 年 7 月 6 日～7 日 檀原考古学研究所（奈良県檀原市）

〔その他〕  
ホームページ等  
フェニキア・カルタゴ研究会  
<http://phoenician-punic.pya.jp/>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
佐藤 育子 (SATO, Ikuko)  
日本女子大学 文学部 研究員  
研究者番号：80459940

(2) 研究分担者  
なし

(3) 連携研究者  
なし

(4) 研究協力者  
青木 真兵 (AOKI, Simpei)  
後藤 麻希子 (GOTO, Makiko)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)